

こころ日記「ぼちぼち」その②

9

脇野 千恵

思いを本に！

性教育の本を出さないかという出版社の思わぬ誘いに、その当時のサークルメンバーはすっかりその気になってしまいました。初めて聞く出版社名に戸惑いもありましたが、とりあえずこのチャンスを逃さず前向きに考えることにしました。

その頃、私は京都国際社会福祉センターで、学校現場で役に立つ様々な援助方法を学んでいました。「家族療法」もその一つでした。そこで講師をされていた団士郎先生との出会いは、本を著すことの後押しをしてくれるものでした。(今でも続く長いお付き合いとなっていますが…。)

本当に出版できるのだろうか。私は東京に出かけたついでに、神田界隈に出向き、依頼のあった出版社を訪ねてみたのを覚えています。とあるビルの一室だったように思いますが、周辺には、アダルト的な本を並べている本屋があったような気がします。

大丈夫？というのが正直な思いでした。

男の子は「性」をどこで学ぶの？

さて本に著すとなると、何を目的とするのか？本を読む人の対象を誰にするのか？どんな人に私たちのメッセージを送りたいのか？といったことを明確にしなければなりません。

そのころの私たちの疑問は、「男の子は自分の心とからだの成長を、いつどこで、どうやって学ぶのだろうか？」ということでした。2000年頃、性教育バッシングが吹き荒れていた時期、某総理大臣が「男の子っていうのは、そういったことは自然に学ぶものなんだよね」と国会で発言してしまったことが、性教育の学習を大きく後退させてしまったなと思っていますが…。

女の子は、将来出産をするかもしれない性です。月経のことは、親からも教えても

らうことが多い。しかし男の子は、大人の体（精通）になっても誰にも告げず、“大人になったんだね”と言ってももらえない。実際に自分の息子がいつ大人になったかも知りません。そんな疑問から大人に成長する節目の男女差に焦点を当て、あえて「男の子の性」をテーマに絞った学習実践を試みていました。男の子の性がちゃんと語られないのはやっぱりおかしいという思いがあったので、男の子のための本にしようと思いました。

本を出すからには、より多くの人の手が手に取ってくれるものにするのが大事です。とりあえず「執筆に参加したい人！」という声掛けに、サークルメンバー4人が手を挙げてくれました。全体の構成などのアドバイザーとして、出版業界に詳しい団先生をお願いしました。

内容や構成は

- ・科学的な知識をベースにした男の子のからだと心の成長について
- ・成長期にある男の子のエピソードあれこれ
(メンバー全員が、自分の息子を含め色々なエピソードを集めました。)
- ・メンバーの会話形式を取り入れる
- ・漫画で表現する部分を入れ、子どもも理解できるようにする。
- ・対象者は、「男の子をもつお母さん」といったこと挙げてみました。

大人の「性と生」の語り

原稿の打ち合わせには、いつも団先生、漫画家の外村晋一郎さんも加えて、何回も討議を重ねました。その話し合いで何より新鮮だったのは、性教育を研究する人たち以外の男性と、「性」について本音で語り合

うことでした。しかも執筆のメンバー4人は、全員女性です。

当初の会議では、原稿の構成や内容に終始していましたが、少しずつ一般社会における「性」の問題と課題についての話題になっていきました。それぞれの成長期での思い出や、男性と女性の「性」の捉え方の違いなどを赤裸々に語り合いました。私達は専門家によくありがちな、何でも「性」にからめて議論する傾向にあったので、リアリティのある男性の話には、目からうろこでした。

執筆会議で学んだことは、「性はとても日常的なこと」ということでした。「性」は特別なものではないと言いながらも、“性とは何ぞや！男と女はこうあるべきだ！”など、周りからはうるさいやつらやだなあと思われていたのではないのでしょうか。自分たちの日常はさておき、理論的なことばかりに目がいきがちだったのです。

多くの人たちは「性」はごく普通の営みとして捉えています。(日本社会では、タブー視されている課題でもありますが)

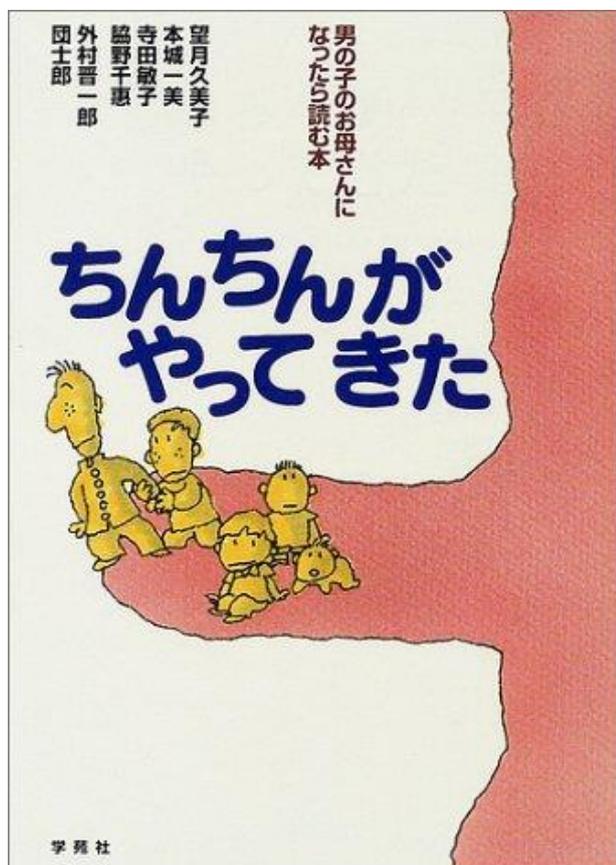
一般社会では、「性教育」はまだまだメジャーではなく、私達がいかにマイノリティであるかを気づくことができたのです。「性を人権として捉える」などとは、社会の中ではまだまだ理解されていないということも分かりました。

現実の「性」の課題を、性教育を実践することとで問題解決することは、容易ではないなとも思いました。

執筆の期間は、私たち4人の意見もなかなかまとまらず、原稿完成までに約1年以上かかったのではないのでしょうか？

団先生の挿絵とサブタイトルの「男の子のお母さんになったら読む本」が気に入りました。出版社との交渉などに奔走してもらった団先生には感謝です。

出来上がった本を手を取った時は、なかなか感慨深いものでした。が、完成までに皆で性に纏わる話題を語り合ったそのプロセスがとても楽しく、今にしてかけがえのない時間だったなと思っています。



あれから 20 年…

男の子を持つ母親からの相談内容は、今も昔も変わりません。親向けの講演会に行くと、母親である人から、男の子への思春期の扱いについての悩みが多くあります。現在の日本社会は父親がいても、不在がちな家庭がほとんどです。活発な思春期を迎えた子どもの対応に困るのは主に母親。

今は男性も女性も育児に携わる人が増えてきました。ひょっとして私たちの本は、時代遅れと？言われてしまいそうですが、20年たった今でも変わらない子育ての現状があることに、目を向けたいと思っています。

出版から第2刷になり、より多くの人に届いたことは何より嬉しいことでした。

この本は、もう絶版となってしまったことは残念ですが…。

つつく